

今回のテーマは「友達」

友達になりたいなあと思っても、うまくいかないときもありますよね。
人はそれぞれですから、周りに馴染めなくても大丈夫です。自分の価値観をしっかりと持ち、ありのままに生きていくこと。自分の気持ちを素直に話してみること。心を開けば、きっと相手も心を開いてくれるはずですよ。



ウエズレーの国

あすなろ書房

ポール・フライシュマン／作 ケビン・ホークス／絵 千葉 茂樹／訳

ウエズレーが暮らす町は、男の子はみんな決まってモヒカンで、住んでいる家もみんな同じ形をしています。みんなとは違う髪型をして、本ばかり読んでいる変わり者のウエズレーに友達はいません。いじめっ子はたくさんいるけれど、ウエズレーは逃げるのが得意。学校の行き帰りに「自分だけのカッコいい隠れ家があったらいいのになあ」と、いつも考えていました。

夏休み、ウエズレーは自由研究に自分だけの秘密基地を家の庭に作ることにしました。耕した庭に、風が運んできた不思議な植物の種が芽を出し、新しい作物が育っていきます。生活に必要なものはすべてこの不思議な作物とウエズレーの知恵から生み出され、作り上げていく【ウエズレーの国】に、いじめっ子たちも興味を持たずにはいられません。

空高く成長していく不思議な作物と共に、自分だけの文明をいくつも作り出していくウエズレーの姿は、空と太陽を掴んだように輝いていくのです。



あめだま

ペク・ヒナ／作 長谷川 義史／訳 ブロンズ新社

遊び仲間に入れてもらえないドンドン、いつも一人でビー玉遊びをしていました。ある日、新しいビー玉が欲しくなって行ったお店で、ドンドンは見たことのないビー玉を見つけました。「それは、あめだまや。あーまいで」とお店のおじさん。ドンドンは袋に入ったいろんな色のあめだまを買って帰りました。

ドンドンは最初に、見たことのある模様のあめだまをなめました。すると突然、リビングにあるソファが話す声が聞こえてきて、びっくり仰天！ このあめだまをなめると、普段は聞くことができない色々な声が聞こえてくるのです。犬のグスリの声や、天国にいるおばあちゃんの声。

そして、オレンジ色のあめだまをなめたとき、外から声が聞こえてきました。それは、オレンジに染まる夕暮れの公園から聞こえてくる、友達の心の声でした。

自分の言いたいことや思っていることを伝えるのは簡単なようで難しくても、心が通いあったときは、ほんのりとハートが温くなるものです。そんな気持ちが人を優しくしてくれるのです。